

座談会 (続)

木質材料需要拡大の飛躍の年に —木の家“北国ハウス”をめぐる—

出席者 秦 貞彦・中森清治・阿部 勉・増谷清二・宮島 寛・一宮忠雄（発言順・敬称略）

司 会 盛 功（北海道立林産試験場副場長）・記 録 伊藤勝彦（北海道立林産試験場特別研究員）

司会 それでは、基本構造から始まって設計上の苦勞、いかに単価を抑えるかなどの大変な面もあったようですが、これでようやく文字通り産・学・官それに民の協力により着工という運びになったわけですね。

ここで皆さんから“木の家”着工から竣工までの、実は今日初めてご披露するんだというような話題も含めてのお話をしていただければと思います。

道産材の良さと高断熱・高气密を追求した

秦 先ほど一宮さんがおっしゃったとおり、この設計委員会のなかでは本当に権威ある先生方から基本的な問題や考え方を含めているんなご提案があった。私共の最初の方向と営林局の考え方は必ずしも一致しなかったんですが、木質材料需要拡大協議会では、折角のそういう立派なご意見すべてを取り入れたいというぜい沢な気持ちを持っておったわけです。

その結果として建築単価が上がったのではと思われる方もおりますが、私はそうではなく、

秦 貞彦さん

北海道木材協会専務理事

北海道木質材料需要拡大協議会事務局長



基本的にはですね、やはり北国の生活を快適に過ごすためには高断熱、高气密をまず最初に追求しなければならんということで、それらの工法に対してのお金が若干掛かったというふうに考えているわけです。一例として、窓、窓枠、玄関の戸は全部木製を使ったという点です。この木製サッシが残念ながらいまだ大量生産体制にないので割高になっている。

もう一つは、木材の新しい使い方ということで天井にはカラマツのパネルボード、居間の階段室にはトドマツの羽目板を使ったということで、これは材料費はそうでもないんですが、大工手間賃に掛かった。合板とかクロスを張るのとは違い、

どうしても大工の手間が掛かるということですね。

それと道産材のPRですから、北海道のすばらしい材料である広葉樹の造作材、これの良さを強調したいということで、まあご覧になってお分かりになるように、タモのすばらしい無垢材を使っていますので、この点でも単価上昇の一つの要因になったと思っております。

司会 関係者の英知を集めた立派な建物が出来上がった。ここで実際に見てもらうときにいい印象を与えるためには、中に置かれている什器とかインテリア等が非常に影響する。中森社長さんがあちこちに働きかけて経費をなるべく掛けないでいろいろ取りそろえたとお聞きしたんですが…。

ステテコ一枚で家中歩けるぐらいに

中森 これは私ひとりではなくて、秦さんとか一宮さんがそれぞれのお立場で関係方面への協力を得た結果です。そこに生活がある実感を演出するには厨房関係とか洗面とかが大きな役割を果たしますからね。かなり関係メーカーさんにはご協力をいただいております。また家具もそうです。

いずれにせよ、木造住宅を普及していこうとすれば木材業者や木材関連のものだけではうまくいかないのではないかと思います。建築もからむし、建築技術も伴う、しかし建築技術だけでは決していい家ができるとは思わない。

現実に木造住宅でもナミダタケだとか、結露がひどいとか、最近ではダニの問題とか…。ですからお医者さん必要だろう。木質の専門知識も必要だろう。それから昆虫とか黴菌とかの専門家、木造住宅に住む一般消費者からも参画して“北国ハウス”を求めていかなければと思うんです。

“木の家”、あの建物をそっくりそのまま「一軒売って下さい」「二軒下さい」というお客さんがあるのではなくて、これを勉強の場にしていただけたということ、あのものが「坪いくら」うんぬんするよりも、それを参考として取り入れていただければいいのではないかと。そういう意味から誠にいい企画であったし、いい結果をもたらすのではないかと期待しております。

中森清治さん

ホームインサル株式会社
取締役社長

北海道住宅リホームセンター理事



ただ、この建築でいろいろ配慮した成果が表に現れていない面があります。例えば断熱でも、これぐらいの断熱であれば一冬にドラム缶10本使うが、こうやるとドラム缶5本半で済むとかいう、その生活の在り方を表に出してご紹介しなきゃいかんのではないかと思うんです。

それからもう一つ、和室の天井板にしても、センの天井板のように道産材で十分使えるものがある。今までは確かに本物のスギの天井板があった。それがラミネートされて全く薄い2.5mmのベニヤ板に紙を張ってあるようなものに代わってきている。いま、ステテコ一枚で家中を歩き回れるように家全体を暖めようというときに、あんな薄いベニヤを吊り木だけで施工しているのだから、和室の天井から一番熱が逃げてしまう。これを機会に少なくとも北海道の住宅の和室天井には、道産材でもっともっといいものが開発できるんじゃないか、既に気密性のある道産木製サッシが普及し始めているのですから是非突破口にして欲しいなあと思っています。

司会 それではここで、既に話題になったものもありますが、“木の家”に使われた木質系部材といいたしめようか、材料を中心に皆さんからお話をしていただけませんか。

㊦マークこそが製材製品ですね

一宮 私が実施設計に掛かったとき、まず構造材と内装材を決めなければならぬ。今まで宮島先生方と3年にわたり木質材料関係のPR印刷物を出してきて、とにかく木材も乾燥材の時代、㊦マークを押せとかいつも言っていたんですよ。

今度自分達が実際にやることになって乾燥材の

調達を秦さんに相談した。ところが秦さんはえらい苦労をしたようです。

秦 私も道木協だから構造材に使う乾燥材ぐらい電話一本で2、3日中に届くという錯覚があったんですね。どっかい12%まで落としたエゾマツ・トドマツの乾燥材約30㎡集めるのに1カ月かかりました。これでだいぶ施工期間がズレちゃった。これからは乾燥材こそ製品でございますよという時代になって欲しいと思います。

一宮 秦さんからM木材には乾燥材があるというので行きましたね、ところがどの程度の乾燥なのか店の人も分からない、「含水率計があるか」というと持ってきた。どうも変なので調べたら電池が入っていない。まあそこでは天乾を随分やっていて20%前後になっているようでした。

中森 製材販売店で「お宅のこれは乾燥何パーセント？」と聞いても分からないのが普通だと思いますよ。

増谷 ほとんど乾燥材は無いんですよ。製材出荷量の5%位でしょう。乾燥経費を価格に上乗せできないということ。誰が負担するのかという問題が大きな原因になっているんですね。乾燥しているところもサービスでやっているっていうんです。

秦 実は昨年、乾燥材普及のための準備会が20数名の有志で開かれてね。これからの針葉樹製材の需要開発には乾燥が問題になる。我々道木協も参画して行動を起こそうじゃないかということまできているんです。

1本いくら、1枚いからの単価表示を

中森 私は木材業者でないからそう思うのかもしらんけれど、考えてみると木材屋さんは「ひと山いくら」とか「百石いくら」とか話が大きいんですよね。ですから実際、柱一本いくらするのかわからないのではないかと。一本いくら、一枚いくら、そういう値段を付ければまだまだ一般ユーザーになじみやすいんだと思うんです。そういう意味で木材業者の方は、いい時はいいし、だめな時はだめだ、ではなく、もうひとつ商売について

真剣に取り組めばまだまだ木材の需要は拡大されると思うんだけど。

いざ必要というときの木材情報はゼロ

一宮 内装材のことなんですけれども、これがさっぱり分かりませんですね。それで、しょうがないんで林産課に行って相談したり、林産試験場まで何回も足を運びました。

トドマツのパネルボードを使ったんですが、最初はエゾマツのパネルボードを使おう、節があってもいいじゃないかという話を足達先生ともしていたわけ。ちょうどその頃林産課へ行きましたら、沢田林産課長から「トドマツの間伐材を使えないだろうか」という話がでた。それで林産試験場から技術指導を受けていたH林業にトドマツのパネルボードを作ってもらった。

その他、カラマツのドア・枠材を使っているのですが全く狂っていないんですね。私は集成材よりも無垢材が好きなもんですから、これはなかなかいいなあと思っています。また、中森さんもおっしゃっていましたが、センの天井板も評判がいいですね。特に洋風式の和室にいい。

それよりも一番びっくりしたのは、普通ああいうものを始めると材料の見本やカタログを持って気密材料だとか、防腐剤、パッキン用だとかを説明に建材屋さんが来るもんなんです。実際に建材関係の人達は来ましたが、木材関係のメーカーは一社も来ない。ただこちらから電話を入れてストロブの羽目板をみせてもらったのはありますが、木材屋さんが全然来なかったというのには、私共建築関係に従事してきた者には不思議でした。こういうことだから、いまだに公設の林産試験場に行って何がいろいろかと木材の相談をするわけですよ。

まあ、今回の企画は自分達の団体である木材協会だからということで、頼り切っているんだという気がしないでもないんですが、いずれにせよ、宣伝だとか、営業だとかに誠に配慮がない。この企画は一般紙を始め業界紙にだって何べんも記事になっているんですけど、これに対して敏感な反応を示さんですね。

良いものを喜んでもらう努力がない

宮島 そこが木造住宅の減った一番の原因ではないんですか。例えば昭和48年のときにだって、木材が足らなくなったとか、売り手市場だとか、北海道唯一の公設市場だといっている北木市の人達でさえ、ただ手をこまねいていた感じがありましたからね。悪い物ばかり売ったでしょう…。高い値段だけはとって、あれで木材は嫌われた。あのときの悪い印象がいま家を建てようという人達にはあるんですよ。

良い物を提供してユーザーに喜んでもらう。買ってもらう努力がないとこれからも伸びは期待できないでしょう。

阿部 私もこの委員会に参画させていただいて、いま一宮さんがおっしゃったように、どういふものが、どこで生産され、どんな価格になっているのか非常にあいまいなんです。

阿部 勉さん

北海道営林局
企画調整部企画課長

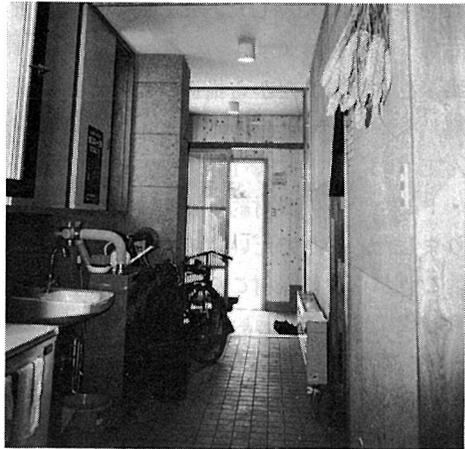


私も国有林としても、森林・林業を含めてその辺の情報提供をやっていきたいと思っております。そのためにも“木の家”が情報サービスセンター的な一面としての成功を望みたいです。

司会 “木の家”オープン後の反響がどんなものだったのかお聞きしたいと思います。国有林では研修の一環ということで、営林署職員の皆さんが団体で来られたということも聞いております。そこで阿部企画課長さんからまず……。

“木の家”を通じて職員の意識改革を

阿部 そうですね。ある署では研修というよりは、国有林も立っている木を丸太にして販売、という従来の感覚をもうちょっと前進させたい。意識を変えていきたい、というそちらの方が強かつ



好評の土間空間

たんです。極力多くの職員にパンフレットを配り、実際はかなり見てもらいました。

一宮さんの方が詳しいだろうと思いますが、一つはまず外観の色合いが非常に反響を呼んでいた。それからあの土間空間を設けたということも好評だった。羽目板の節、あんなものも割合い好かれていたし、タモの重厚な梁なんかも良かったという声が多かったですね。

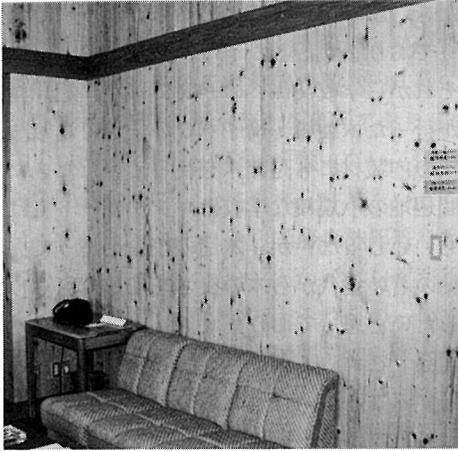
あそこの看板は苫小牧営林署の職員が作ったものですが、更に外構工事等にも職員を参画させて意識の高揚を図ろうとしたんです。まあ先程、中森さんがおっしゃってありましたように、ただ見ていただくということ以外に勉強する場であるということ、そういう点で有意義ですね。

司会 増谷企画係長さん、林務部の方への手ごたえはどうでしたか。行政としての受け止め方などについても……。

“木だらけ”だけでなく、良い面の活用を

増谷 木材を使っているのは大いに結構だけど、設計上一般向きでないという言い方をする向きもあるようです。それにはいい所だけ使ってもらえればいいんだと、こういう使い方もありますよという説明をしてやっています。

一宮 ハウジングのY社あたりは木をたたえる会合なんかに出て「非常に参考になる。新しいモデルハウスを建てる時には道産材を使ってみた



若者に好かれている羽目板の節

い」と木材をふんだんに使う企画を考えていると聞いていましたし、Hハウジングには完全に「木の家」の影響が入っています。しかし木は使っているのですが、道産材はどこにあるのか分からなかったとかで、ヒノキだとか本州材を使っています。

増谷 それともう一つ、木材と木材以外の使い分けといった提案があってもいいんじゃないかという気がするんです。何んでもかんでも木ではなくちゃというのではなく、木がふさわしいといった使い方ですね。

30代を中心にした階層が目玉している

秦 道木協にもいろんなお客さんから問い合わせがありますが、「木だらけ」だというご批判のある方には、この部分はクロス張りにしたら、この部分は合板でもいいものがありますよ、そういうサジェッションをしています。

これらの話をマクロ的にいうと、お年寄りの方、50代以降の方は何となく落ち着かない。ところが30代を中心にした若い方々は、大変すばらしい、住むんならこういう家に住みたい。ただ残念ながらいまの資金力では手が届かない。こういうことが反響としてあるようです。そういう若い方々には「高い部分はカットして安いものでおやりなさい。それでも十分木の雰囲気の家は建ちますよ」というアドバイスをしているんです。いろんなア

イディアを皆さん取り入れているようです。

一宮 特に昭和1桁から2桁の前半がいかんですね。45～55歳位の人が最も抵抗があるようですよ。どうしてなのかと思ったら、一つは今までにいいものを見ているんですね。北海道の無垢、無節の材を見ているわけなんです。だから節が気に入らない。それともう一つは間取りが非常に若向きなんですね。だから40歳位までの人はえらく高い評価をする。これと同じ家を是非建てたいなあってことになる。

参観者ですが、普通ああいう所を見に来るのは女の方が多いんですが、ここは男性が多いんですね。ということは、専門家、大工とか設計士だとか、そういう連中が多く来ているんじゃないかと推察されます。他の展示場ではノウハウは教えてくれない、見せてくれない。ここに来れば何んでもかんでも実物を前にしてベラベラしゃべってくれる、ということもあるんじゃないかと思えます。

材料面での反応としては、先ほど触れましたH林業のトドマツパネルが大変評判がよくて、もう既に引き合いがだいぶきているみたいです。それにカラマツボードやカラマツセメントボードの内装材もいいですね。ボードは林産試験場の120mm幅の製品ですが、企業製品であればウンと出ると思えますし、カラマツセメントボードは特に専門家が注目していますね。

宮島 幅が120mmのボードは原木の関係で企業生産はなかなか無理ではないの。製材してから乾燥したら相当縮まるでしょうし、太い丸太が出てこない現状では90mmが限度ではないだろうか。

断熱材にウッドファイバーを

中森 断熱材というとすぐグラスウールか、ロックウール、それにセルロースファイバーなどですよ。セルロースファイバーは一応木質系ということになるのかもしれないが、いまアメリカではウッドファイバーというのを完全に断熱材として使っています。北海道の暖かい家も木質材料の断熱材でいけるんじゃないかなあと大きな期待を持っ

ているんですよ。

一宮 G商會が輸入しているマッチドアという断熱ドアがあるんですが、その中は木質系の断熱材なんです。ただし木が狂うとかで断熱材の上にアルミ板を接着させて伸び縮みがないようにしているらしいんです。何か接着する技術がノウハウになっているらしいんです。断熱ドアなんかもこれからはいいと思うんですが。

司会 示唆に富んだ話題がどんどん出てきましたが、残念ながら時間が少なくなってきました。

昨年文部省通達で木材使用促進だとか、住宅建設を内需拡大策の柱にするだとか、木を使うためにはいろいろな出来事があったわけです。そういうことを踏まえて“木の家”を頭に浮かべながら、今年の木質材料需要拡大の取り組みについてお話を聞きたいと思います。

異業種との連携を深めて効果的に

秦 今年も昨年に引き続いて道民の方々にもっと木の良さを知っていただくためのPRを幅広くやっていきたい。その手段としてまず、昨年からは木材業界としては初めて試みたテレビによる一般向けへのPR——イメージをPRするという番組を作るというのは非常に難しいのですが、いまやっているものの反響を見ながら続けていきたい。そしてターゲットを建設関連業界に絞るとともに木材業界との連携を強める行動を取ってきたい。それと一方では、針葉樹、広葉樹とも新しい製品を開発し、その販路の開拓にも本州を含め強力に取り組んでいきたいと考えております。

モデル住宅については、このあと毎年一地域、すなわち地方の拠点都市である旭川、北見、帯広、函館、少なくともこの4カ所ぐらいにはそれぞれの地域にマッチしたものを建設する構想を練っております。

現在の“木の家”については、大工、工務店ばかりでなく木材に関するインテリアの研修の場にも、また、木彫教室の常時開催、木工木製品のチャリティショーなどの会場にも活用していきたい。これら多くのことを通じて、多くの方々に来てい

ただき、木の良さを知ってもらいたいと思っております。

それから学校関係へのPRですが、旭川地方木協が行った木製机・椅子もこの一環であり、更に学校の内装材にも是非木を使っていたきたい。山間辺地の小規模な学校はコンクリートではなくてもいいじゃないか、木造の校舎を造って児童・生徒の若い世代から木の良さを知ってもらいたいと思っております。

司会 これらに関連して増谷企画係長さんから補足することがあればお願いします。

増谷 ただ今の秦さんのお話に尽きます。行政としても一層の努力をし、業界と一体となってやっていきたいと考えております。

増谷清二さん

北海道林務部
林産課企画係長



実際に木に触れて、木の良さなり、使い方というものを中間ユーザーにも、一般消費者にも知ってもらい、実需に結び付くような事業を今年も展開していきたい。特に意識しているのは異業種との連携や地域独自の活動をどう盛り上げていくかを道行政として積極的に取り組んでいきたいと考えております。

また、先程お話がありました乾燥材の普及は、木材の良さを理解してもらうためには不可欠なものだということで、業界の自助的な組織作りが今年の早い時期に実現するよう、労を惜しまず協力してまいりたいと思っております。

司会 阿部企画課長さん、全国各地で国有林が森林、林業のPRや木材需要拡大に取り組んでいるニュースが伝わってきておりますが、北海道の国有林として今年の抱負など、ここで公表できるものがあればお話し聞きたいと思えます。

国有林のPRにご理解とご協力を

阿部 これは仮称なんですけど「森林・林業情報センター」というものを営林局の敷地内に建てまして広く利用していただくことを考えております。この内容はやはり国民の森林を預っている国有林ですので、これまで以上に森林・林業というものをPRしていこう。それから国際森林年等を契機にしているんなキャンペーンとかイベントが行われ多くの成果がありますので、それらの一つでも二つでも更に効果あるように展開していきたい。

道産材の需要拡大ということでは国立林業試験場道支場を窓口に見板を掲げて、国有林コーナー、日曜大工コーナー、情報サービスコーナーと3つのコーナーを設けてやってみたい。また、一般住民との結び付きを重視していくためにも、モニター制度を取り入れていきたい。

それから、国有林は大きな組織と多くのモノを持っていますので、これを活用していわゆる「ふれあいの場」、最近流行の交流フェスティバルといったものを通して、人あるいは精神的な結び付きおよびモノの結び付きを図って情報を使っただく、物をお買い上げいただく、そんな掘り起こしをやっていこうと考えております。

あと一つ、長年にわたって国有林野事業に従事してきた職員のなかには、隠れたいろんな貴重な体験をしてきた人材がいるんじゃないか、そういっ

た方々のボランティア活動みたいなものも計画しております。

司会 昨年から住宅建設促進というのが内需拡大策の重要な柱だというふうに国では言っている。また一方では、今年は住宅関連業界にもようやく薄日が射してくるだろうとも言われているようですが、中森社長さん、そのあたりと“木の家”活用方法について考えていることがありましたらお聞かせ下さい。

木材業界の創意工夫と果敢な熱意で

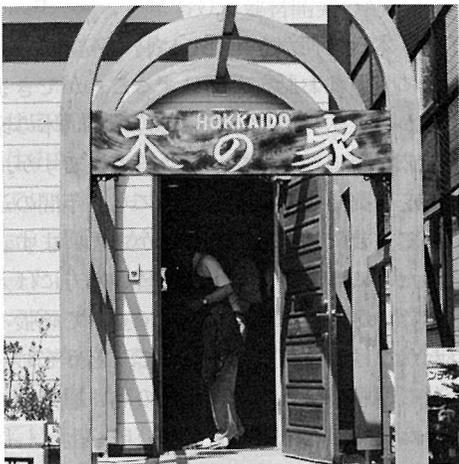
中森 住宅政策とか景気が上向くとかはそう簡単に楽観は許さんと思います。

今後上手に“木の家”を活用することについては、意欲ある建設業者の方がグループ化して、あの中かの良さを取り入れた営業活動を一生懸命して欲しいと思いますし、阿部さんの言う国有林のOBじゃないけれど、業界のOBの方のボランティア活動として、あそこを「木材相談センター」とし、木造住宅に関係する参考図書もあそこに行けば閲覧できるし、林産試験場の研究成果、開発製品などもご紹介できる、というように当番で出たって木材の良さを説明するぐらいの取り組みをしてくれることを期待したい。

ただあれによって、建設業界にどこまで木造住宅が普及していったか、この効果測定、あれによって何軒木造住宅が増えたかということとはなかなか難しいと思う。ですから木材需要拡大という精神的な一助、そして2年経って結果が良ければ更に民間の力で、民間主導で取り組んでいくべきではないか。要するに一番大きいのは建設業者だけではなく木材業者、民間業者の結束による創意工夫と熱意が必要ではないかと思います。

あの“木の家”しか造れないというのではなく、いろいろの設計タイプを関連するグループが持ち寄ることになっていますから、いろんな相談に応ずることができるわけですよ。

司会 さて、“木の家”展示事業が62年3月まで続くわけですが、一宮所長さんにはまだまだ一般参観者との接触や関連する催し物の対応をお願い



国有林のPRは全職員で……
営林署職員が作った看板

いすることになるかと思えます。そういう面での決意などを……。

建材として手間のかからん技術開発を

一宮 感想みたいなことにはなりますが、一つは木材業界、特に林産試験場が中心になって木質建材として手間のかからない技術の開発、製品開発をして欲しい。例えば、パネルボードを張るにしてもえらい手間がかかる。ですから裏打ちするとか、大きなパネルを作るとか。それとプレハブと

一宮忠雄さん

北国の住まい
相談所所長



か2×4への対応策として塗装を兼ねてもらおう。2×4というのは簡易耐火にするため内側に防火ボードを張っているが、その上にそのまま一発でビニールクロスで仕上げるのが一番安く早いわけです。

もう一つは宣伝だとか営業活動についての真剣な努力を木材業界の皆さんにお願いしたい。私がこれまでこういう仕事をやってきて感じたことは、こういうなかで努力している人、もまれている人が非常にうまくやっていますね。

司会 今年の取り組みをそれぞれの立場からお話ししていただいたわけですが、最後に宮島先生、皆さん方のお話をお聞きになって総括的にお願いします。

これからも課題はまだまだ沢山ある

宮島 いろいろ良いことを言っていたいたんで特に申し上げることもないんですが、やはり、“木の家”を見に来てこういう材料を使いたいというとき、あそこにあるものすべてを皆さんが使えるような値段で、いつでもお届けできるという体制、そういう機能のできるグループが早く整備

宮島 寛さん

北海道大学
農学部教授



される必要があるのではないかと思います。

それから、構造材の乾燥の話が出ているけれども、日本の在来工法の10.5角主体のものは非常に乾燥しにくいですよね。これが2×4だと乾燥しやすい、実際の普及の面でも2×4より何歩も不利だし、遅れている。逆に2×4におびやかされるよりも、積極的に2×4を道材でやっていく方がいいのではないかという考えを持っているんです。今後トドマツの造林木が出てくるが立派なものには使えっこない。しかし乾燥して2×4に利用すれば何とか使える。

造林木は必ず乾燥して売らなければ駄目だということです。しかも、構造材に使うなら「これは強度がいくらあるんですよ」という保証なしで売るといふ、そんなひどい話はないと思います。工業材料である以上、他のものに対抗できる形にもっていかなければならないし、そういう意味では課題はまだまだあるわけですね。

司会 本日は何かとお忙しい皆さん方から終始ご熱心に貴重なお話をお伺いすることができました。確かに、木材復権の期待を担い、“木の家”は今後2カ年にわたり展示されるわけですが、その成果を確実なものにするためにも2年間の運営が極めて重要になるのではないかと思います。

そのためにも、本日まで出席の皆さん方には大変ご苦勞ですが、これからも先頭に立って頑張っていただかなければならないわけで、どうぞお身体を十分ご留意のうえ、木材業界の熱い期待にこたえていただくことを重ねてお願い申し上げ、長時間にわたる座談会を終らせていただきます。誠に有難うございました。